

留学生の就職意識

ー理系と文系を比較してー

袴田 麻里（静岡大学国際交流センター）

kmhakam@ipc.shizuoka.ac.jp

1. はじめに

日本国内での就職を目的に在留資格変更許可を受けた外国人留学生数は、平成9年から13年で約4倍に増加した（法務省出入国管理局 2009）。文部科学省は、平成20年7月「留学生30万人計画」で、日本社会全体で留学生の「入試・入学・入国の入り口から大学等や社会での受入れ、就職など卒業・修了後の進路に至るまで体系的に」取り組むという姿勢を打ち出している。産業界では、特に技術系留学生のニーズが高い（日本経団連 2009）。しかし、海外技術者研修協会（2007）や横須賀（2007）では、留学生の就職者数増加を阻害する要因が挙げられ、留学生が必ずしも希望通りの進路を実現できていないことも明らかになってきた。

留学生の就職については、これまで全国規模で調査、研究が行われているが、現在留学生教育に携わっている者にとっては、まず目の前の留学生の意識を明らかにし、彼らに対してどのような支援が必要なのかを検討しなければならない。そこで、静岡県内の高等教育機関に在籍する留学生へのアンケート調査をもとに、専攻の違いに着目して、日本での就職を希望する留学生の就職に対する意識を考察する。本稿では、理工学、バイオ・農学、化学、医・薬学などを理系とし、教育学、情報学、経営・経済学、法学、語学・文学などを文系とする。

2. 調査の概要と回答者の属性

平成20年6月から7月にかけて、静岡県留学生等交流推進協議会より静岡県下の21高等教育機関（在籍留学生1473人）を通して、質問紙、またはwebでの回答を依頼し、756人から回答を得ることができた（回答率51.3%）そのうち、406人（53.7%）が日本での就職を希望している。406人の内訳は、文系専攻335人（82.5%）、理系専攻63人（15.5%）、専攻無回答8人（2.0%）である。以下、専攻が判明している398人について述べる。

表1は、専攻が判明している回答者398人の属性である。数は圧倒的に文系が多いが、男女別で見ると、文系では女性のほうが多く、理系では男性のほうが多い。出身地域は、文系の場合、東アジアからがほとんどで77.9%、東南アジア、南アジアが合わせて19.1%である。理系の場合も東アジア出身者が半数以上だが、東南アジア、南アジア出身者も42.9%である。年齢は、文系でも理系でも20～28歳が大半を占める。在籍身分は、文系留学生の79.1%が学部生なのに対し、理系は学部生41.3%、修士生28.6%、博士生14.3%と分散して在籍している。また、理系留学生は文系留学生に比べ、既婚者の割合、就職経験を持つ割合が高い。日本滞在年数は、理系、文系でそれほど大きな違いはない。

表 1 : 回答者の属性

属性		合計	文系	理系
属性		398	335 100.0%	63 100.0%
性別	男	203	157 46.9%	46 73.0%
	女	192	177 52.8%	15 23.8%
	無回答	3	1 0.3%	2 3.2%
出身地域	東アジア	296	261 77.9%	35 55.6%
	東南アジア	66	49 14.6%	17 27.0%
	南アジア	25	15 4.5%	10 15.9%
	その他	5	4 1.2%	1 1.6%
	無回答	1	0 0.0%	1 1.6%
年齢	32歳以上	16	11 3.3%	5 7.9%
	29-31歳	31	24 7.2%	7 11.1%
	26-28歳	123	105 31.3%	18 28.6%
	23-25歳	126	107 31.9%	19 30.2%
	20-22歳	90	78 23.3%	12 19.0%
	19歳以下	8	7 2.1%	1 1.6%
	無回答	4	3 0.9%	1 1.5%

属性		合計	文系	理系
在籍身分	学部生	291	265 79.1%	26 41.3%
	修士生	65	47 14.0%	18 28.6%
	博士生	13	4 1.2%	9 14.3%
	その他	29	20 6.0%	9 14.3%
	無回答	1	0 0.0%	1 1.6%
在日期間	2年未満	77	62 18.5%	15 23.8%
	2年以上4年未満	152	128 38.2%	24 38.1%
	4年以上6年未満	124	106 31.6%	18 28.6%
	6年以上	40	35 10.4%	5 7.9%
	無回答	5	4 1.2%	1 1.6%
婚姻	既婚	44	33 9.9%	11 17.5%
	未婚	354	302 90.1%	52 82.5%
	無回答	0	0 0.0%	0 0.0%
就業経験	有	83	64 19.1%	19 30.2%
	無	312	269 80.3%	43 68.3%
	無回答	4	3 0.9%	1 1.6%

3. 結果と考察

3-1. 留学生が日本で就職したい理由

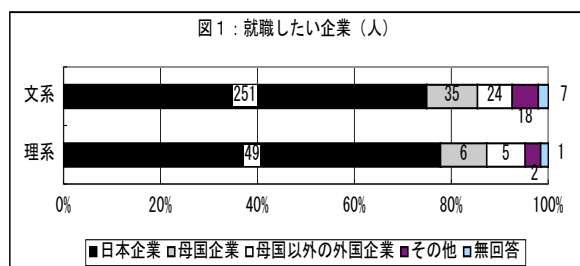
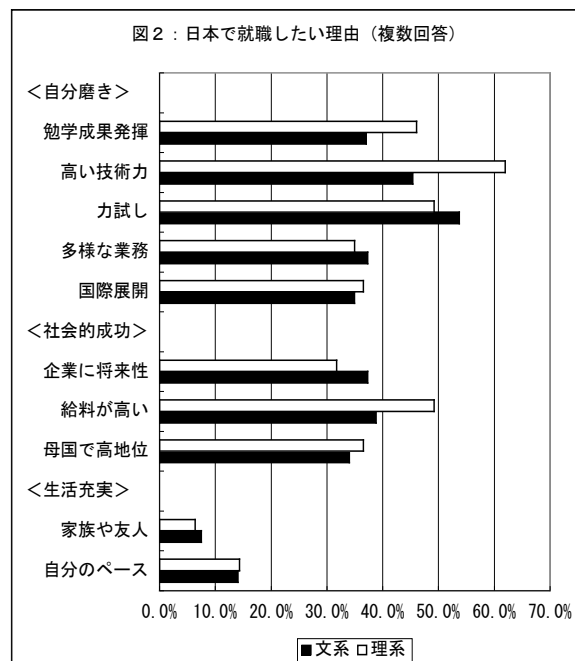


図1を見ると、日本で就職したい留学生の8割弱は、日本企業への就職希望を持っている。つまり、日本で就職したいという希望は、かなりの割合で日本企業へ就職したいということを意味する。

日本で就職したい理由（図2）は、文系、理系に共通して、勉学の成果が発揮できる（「勉学成果発揮」）、高い技術力を持つ企業が多い（「高い技術力」）、実力が試せる（「力試し」）など、自分の能力や実力を発揮し高める「自分磨き」、加えて、企業に将来性がある（「企業に将来性」）、給料が高い、母国で高い地位に就ける（「母国で高地位」といった「社会的成功」を挙げた留学生が多い。



日本は給料がいいから日本で就職したいという希望をしばしば耳にするが、実際には留学生は、給料に並んで自分磨きの要素に重点を置いていることが分かる。特に理系の留学生は、給料の高さに加え、高い技術力を持つ会社が多い日本で、勉学の成果を発揮したい、実力を試したいという希望が強いようで

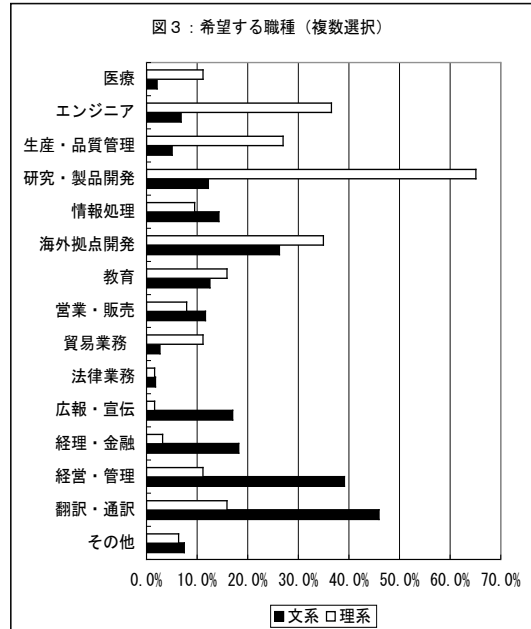
ある。

日本企業側から考えると、留学生が知識や技能を發揮でき、実力を試せる環境を提供できれば、理系でも文系でも優秀な留学生を獲得できるということになる。

3-2. 留学生の希望職種

留学生が希望する職種を見ると、文系と理系で異なる傾向が見られる(図3)。「エンジニア」「生産・品質管理」「研究・製品開発」は、理系が明らかに多く、「翻訳・通訳」「経営・管理」「経理・金融」「広報・宣伝」は文系が多い。文系、理系ともに、勉学の成果を發揮できる職種を希望する割合が高いと言える。特に理系の留学生は、その傾向が強い。「医療」はそれほど希望がないように見えるが、医学専攻の回答者4人中3人が「医療」を希望しており、同様の傾向であることが分かる。

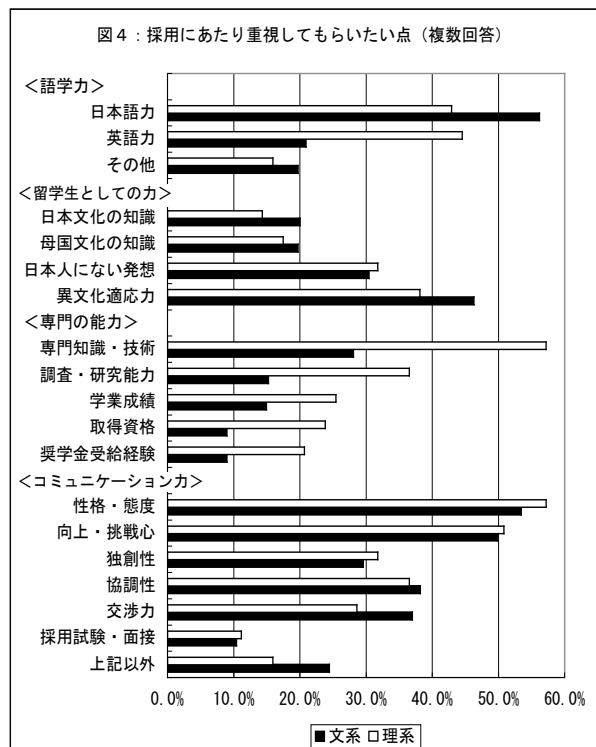
ただ、文系の留学生においては、「営業・販売」「貿易業務」など、一般に文系学生向けだと考えられる就く職種を希望する割合が少ない。先に述べたように、留学生は就職して勉学の成果を發揮したいという意向に鑑みると、「営業・販売」「貿易業務」は、「翻訳・通訳」「経営・管理」に比べ、勉学した事柄と関連が薄いと考えているのではないかと推測される。



3-3. 留学生が考えるアピールポイント

留学生は、留学によって得た勉学の成果を發揮できる企業への就職を望んでいるが、では、留学生は何を自分のアピールポイントと考えているのだろうか。

図4は、留学生が採用にあたり重視してもらいたい点をまとめたものである。まず、語学力を見ると、日本へ留学して身につけた日本語力をアピールポイントと考えていることが分かる。理系と文系で対照的なのは、日本語力と英語力である。文系留学生は日本語力に自信を持っている人の割合と、英語力に自信を持っている人の割合の差が非常に大きい。一方、理系留学生は、日本語力に自信を持つ人が42.9%、英語力に自信を持つ人も44.4%と、ほぼ同程度である。今回の調査で回答した理系の留学生は、大学院生が約半数である。学部生の場合、専攻にかか



わらず日本語で勉学し結果として日本語力が高くなるが、理系の大学院では、英語で研究ができるという理由で、日本語能力を問わずに入学し研究・勉学に当たっている場合がある。また、文系に比べ、東南アジア、南アジアからの留学生が多く、彼らはもともと高い英語力を持っている。そのため、日本語に自信を持つ人の割合がやや下がり、英語に自信を持つ人の割合が上がったのだと思われる。

留学生としての力では、異文化適応力を挙げた人が多い。留学生として来日し、現在まで異文化環境で生活してきた経験は、異文化適応力の高さを実証できる。「日本人にない発想」は「異文化適応力」よりもやや割合が低く、文系 30.4%、理系 31.7%が自信を持っている。「日本人にない発想」がどのようなものなのか分からない、または分かってはいてもどう表現したらいいのか分からないのかもしれない。

日本人学生と比べたとき、留学生としての強みは、語学力と留学生としての力だと考えられるが、母国文化の知識、その他の言語（母国語など日本語・英語以外の言語）に対しては、重視してもらいたいと回答した割合が低い。母国に関する事柄を日本企業に対する留学生としての強みとして認識していないのかもしれない。

専門の能力では、すべての項目において理系の留学生が文系を大きく上回っている。特に、専門知識・技術に自信を持つ割合は非常に高い。また、「学業成績」や「奨学金受給経験」など過去の実績よりも、「専門知識・技術」「調査・研究能力」といった現在の能力を重視してほしいと考えている。

文系でも理系でも、多くの留学生がアピールポイントとした点は、コミュニケーション力である。日本への留学し、勉学・研究を行っていること自体が、向上・挑戦心の表れであり、積極的で前向きな性格・態度をアピールできるためであろう。「独創性」「協調性」「交渉力」にも自信を持っている割合が高いが、採用試験・面接結果は重視してほしいと考えており、コミュニケーション力の高さを示すには、採用試験・面接以外の機会が必要である。

3-4. 留学生に関するまとめ

文系と理系に共通するのは、以下の3点である。

- <1> 日本で日本企業に就職したいと考えている。
- <2> 実力を試せる、勉学の成果が発揮できるなど「自分磨き」を重視する。
- <3> 日本語力、異文化適応力、コミュニケーション力に自信を持っている。

文系と理系に違いが見られるのは、以下の3点である。

<4> 勉学の成果を発揮し実力を試せる職種として、文系は「翻訳・通訳」「経営・管理」を、理系は

「研究・製品開発」「エンジニア」を希望する割合が高い。

- <5> 理系の留学生は、英語力にも自信を持っている。
- <6> 理系の留学生は、文系の留学生よりも専門の能力に自信を持っている。

3-5. 日本企業の意向との比較

2000年以降、全国規模で留学生の就職に関する現状調査が行われている。表2は、日本企業の意向をまとめたものである。留学生の採用経験がある、採用希望を持つ業種は、製造業が多いようである。非製造業では、通信、商業・貿易関連分野の業種が採用に積極的である。これらの業種は、海外展開や海外との取引があり、その業務に当たらせることができる人材を必要としている。職種は、販売・

営業、技術、通訳・翻訳、国際・海外業務が多い。

このような日本企業の意向は、理系の留学生のエンジニアや研究・製品開発に携わりたいという希望と合致するものである。また、通訳・翻訳、海外拠点開発も、留学生の希望と企業の意向は合致している。しかし、多くの日本企業が望んでいる「販売・営業」には、留学生の希望が少ない。今回の調査ではデータ不足で説明できないが、「販売・営業」を希望する留学生が少ない理由を明らかにする必要がある。

表 2：日本企業の意向

	横須賀・小熊(2006)	海外技術者研修協会(2007)	労働政策研究・研修機構(2008)
求人業種	非製造業 7：製造業 3	製造業、卸小売り業	製造業、情報通信業
求人職種	<ul style="list-style-type: none"> ・販売・営業 ・通訳・翻訳 ・海外業務 ・技術開発 	<ul style="list-style-type: none"> ・販売・営業 ・開発・設計 	<ul style="list-style-type: none"> ・人文知識・国際業務 ・技術
留学生採用理由	<ul style="list-style-type: none"> ・海外への事業拡大・進出 ・語学力 ・社内の活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門知識・技術で優秀な人材確保 ・海外業務 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門知識・技術で優秀な人材確保 ・外国語 ・事業の国際化
不安な点	<ul style="list-style-type: none"> ・離職 ・日本語力 ・日本の社会習慣への理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・定着率 ・日本語力 ・組織への順応性 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力によって仕事の幅が限られる
留学生採用で考慮すること	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力 ・日本人との協調性 ・性格・ふるまい・礼儀 ・採用試験結果 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力 ・専門知識・能力 ・日本語以外の外国語 	—

企業は、必要があって留学生の採用を開始した。そのため、業務上必要な専門知識・能力、外国語力は当然重視する。同時に、業務の円滑な遂行には日本語力を不可欠だと考え、採用時には、日本語力を重要視している。また、入社後の人間関係が業務に影響を与えることから、協調性や性格・ふるまい・礼儀も考慮すべき点としている。

このような項目は、多くの留学生が採用にあたり重視してもらいたいこととして挙げた項目である。ただ、このような項目は具体的な基準を示しにくい。そのため、留学生が考える基準と、企業が想定する基準が異なっている可能性は否定できない。例えば、高い日本語力が要求されていると推測されるが、どのような日本語力なのか、高いというのはどのようなことができるレベルなのかは、不明である。また、協調性についても、皆と同じ行動をすることを求められているのか、全体を見渡した上でしかるべき行動をすることが求められているのかは分からない。このような点を具体的な基準で示すことは不可能だが、どのような場合に、企業にはどのような行動が求められるのかを説明でき、また留学生にはその説明が理解できる能力が必要であろう。

離職への不安は多くの企業が持っているが、早期離職は『就職四季報』に「3年後離職率」という項目が記載されているほどであり、留学生に特有の現象ではない。3.1. で述べたように、知識や技能を発揮でき、実力を試せる環境があることを留学生に示すことができれば、日本企業は理系でも文系でも優秀な留学生を獲得できる。入社してから携わる業務とその業務に必要な知識・能力・技能など

を留学生がある程度理解し、自分の実力に照らしキャリアプランを立てて考えることができれば、雇用と求職のミスマッチによる離職は減少させられるだろう。そのためには、日本企業から、留学生が携わる業務の説明が不可欠であり、同時に留学生の情報収集力・分析力が必要である。

4. 終わりに

今回の調査で、静岡県の高次教育機関に在籍する留学生の希望、自信のある点などを明らかにすることができた。併せて、留学生の希望と日本企業の意向が合致する部分、合致しない部分も一部ではあるが提示できた。大学は、これら留学生の希望と日本企業のニーズを考慮しながら、留学生指導を行うことが必要であろう。

特に、日本語力は、多くの企業で重視されている。研究は英語でできるからという理由で、理系の大学院を中心に日本語不問の留学生受入れが進んでいるが、留学生生活を実り多いものにし、卒業時の進路選択を数多くするためにも、留学生にとって日本語力がいかに重要か大学内で気付きを促していかなければならない。ただ、どのような能力が、どのレベルまで必要かは明らかではない。また、企業が日本語力に不安を感じるのは、日本語力に起因するのか、専門知識・能力やコミュニケーション力に起因するのかも不明である。今後の調査で明らかにしていきたい。

参考文献

- 財団法人海外技術者研修協会(2007)『平成18年度構造変化に対応した雇用システムに関する調査研究(日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究)報告書』財団法人海外技術者研修協会
- 横須賀柳子(2007)「企業の求人と留学生の就職に関する意識比較」『留学生教育』第12号、留学生教育学会、pp. 47-57
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構(2008)『外国人留学生の採用に関する調査』JILPT調査シリーズ No. 42、独立行政法人労働政策研究・研修機構
- 横須賀柳子・小熊裕美(2006)『外国人留学生の就職活動に関する調査研究 - 2003年度 JAFSA 調査・研究助成報告書』国士舘大学

参考URL

- 文部科学省(2008)『「留学生30万人計画」の骨子』
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm (2008年11月23日閲覧)
- 法務省出入国管理局(2009)『平成20年における留学生等の日本企業等への就職状況について』
<http://www.moj.go.jp/PRESS/090714-1.html> (2009年8月23日閲覧)
- 経済産業省(2006)『「社会人基礎力に関する調査」の結果について～企業が求める人材像』
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/cyosa2006.htm> (2008年11月23日閲覧)